

編集後記：国内外の政治・経済状況が激変した2008年も終わろうとしている。多くの人々が漠然とした不安を感じており、政治・経済を始め多くの事柄の将来予測が不透明な世の中である。先の読めない時代であるからこそ、予測情報とうまく付き合っていく必要がある。天気予報をはじめとする予測情報には確率が伴うものであり、確率的な情報に対する合理的な対応の仕方が課題である。

しかし、人間には、

- ①事態が明白になるまでは、危機が身近に存在することを否定しがたがる傾向、
- ②危険を最小化し、状況を楽観視させてくれる情報を進んで受け入れ、危険で不快な情報は出来るだけ否定しようとする傾向、
- ③異常な情報はできるだけ正常の側に引き寄せて解釈して受け入れる傾向、

という、いわゆる「正常化の偏見」というのが常につきまとい、確率情報に対してバイアスを与える。予測情報の受け止め方を「信仰」の次元から、合理的で冷静な次元にすることが必要である。

閑話休題、10数年振りに「天気」の編集に携わるようになって約2年半が経過した。編集委員会にほぼ毎回出席し、若手編集委員の方々の議論を聞きながら、時々老人の練言を差し挟んでいる。

前回の編集後記でも書いたように、編集委員長として編集に携わった時代に印刷を電算写植に変更し、初めて原稿をFDで受け付けるようしたが、現在では、

写研フォントも古くなり、オンライン投稿システムが検討されている。「天気」誌上には多彩な記事が掲載され、カラーの図版も多くなり、時代の進歩と移り変わりの激しさをいまさらながら実感している。

しかし、ある面に関しては、必ずしも進歩していないように思われる。それは論文等に掲載される図についてである。

昔の人は図を描くのに非常な労力を費やした。先ずグラフにプロットし、最終的にはトレーシングペーパーにロットリングで墨入れをして完成させた。1枚のグラフを書くのに、現在からは想像できないほど、膨大な時間を図の作成に費やしていた。最近の天気誌上を見ているとどうも図の出来栄が良くないように思われる。身近なところでは気象集誌や気象研究ノートと図と比較してもあまり良くないように思われる。多分PPTやPDFの図から作っているからであろうが、ピントが甘い図が見受けられる。

私が入会している他の学会、例えば、水文・水資源学会誌、日本風工学会誌、日本流体力学学会誌などを瞥見しても図は綺麗に仕上がっている。

私は古い人間なのでそのように思うのかも知れないが、やはり論文等の図が綺麗なことは、内容に関する信頼性を増すと共に、機関誌の品格の向上にもつながると思っている。

是非、「天気」誌上に美しく判りやすい図がより多く掲載されるようになることを希望する次第である。

(藤谷徳之助)